The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「世直し」ノオト（2021 年度・夏）
Author(s)	池田, 光穂; 井上, こう; 岡野, 彩子 他
Citation	Co＊Design. 2022, 11, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86412
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「世直し」ノオト（2021年度・夏）

池田光穂（大阪大学COデザインセンター）
井上こう（国立民族学博物館）
岡野彩子（大阪大学COデザインセンター）
上條美代子（看護師）
北村敏泰（ジャーナリスト）
熊野以素（日本社会保障法学会）
滝奈々子（京都市立芸術大学芸術資源研究センター）
日髙悠登（龍谷大学世界仏教文化研究センター）
宮本友介（大阪大学人間科学研究科）
山森裕毅（大阪大学COデザインセンター）
※所属・肩書は投稿日（2021年7月31日）現在

“Yonaoshi” Note (Summer semester 2021)

Mitsuho Ikeda (Center for the Study of Co* Design, Osaka University)
Ko Inoue (National Museum of Ethnology)
Ayako Okano (Center for the Study of Co* Design, Osaka University)
Miyoko Kamijo (Nurse)
Toshihiro Kitamura (Journalist)
Iso Kumano (Japan Association of Social Security Low)
Nanako Taki (Archival Research Center, Kyoto City University of Art)
Yuto Hitaka (Research Center for World Buddhist Cultures, Ryukoku University)
Yusuke Miyamoto (Graduate School of Human Sciences, Osaka University)
Yamamori Yuuki (Center for the Study of Co* Design, Osaka University)

キーワード ―― 世直し、対話、行為
Keyword ―― Yonaoshi, dialogue, action

「世直し研究会」は、2006年4月から2016年3月まで大阪大学コミュニケーションデザイン・センターにおいて開催された「現場力研究会」の後継組織として2018年4月25日に誕生し、通算で207回を数えます。月1回大阪大学COデザインセンターで開催され、世の中の理不尽や不条理から目を逸らすことなく、「世」のあるべき姿を問いつつ、具体的な現場での課題に取り組む力を養い、「世直し」へと繋げていくことが目指されています。今回掲載したこの「世直し」ノオト（2021年度・夏）は、研究会に集う大学内外の参加者が、研究会での対話をもとに考えて綴った「ノオト（notes）」の第7弾にあたります。すなわち第32回から第37回までの研究会（2021年2月～2021年7月）における対話から編み出された10編のエッセイになります。

この期間は読書会を中心に、下記の内容を行いました。

第32回（2021年2月24日）	読書会［課題図書］ガブリエル・ガルシア=マルケス著『コレラの時代の愛』（木村榮一訳，新潮社、2006年）【オンライン開催】
第33回（2021年3月24日）	環境でお金を受け取る仕組み―「生態系サービスへの支払い」と関わるコスタリカの先住民居住区とその住民についての一考察―【オンライン開催】
第34回（2021年4月28日）	読書会［課題図書］ナディア・ムラド著『THE LAST GIRL―イスラム国に囚われ、闘いを続ける女性の物語―』（東洋館出版社、2018年）【オンライン開催】
第35回（2021年5月24日）	読書会［課題図書］澁谷智子著『ヤングケアラーわたしの語り：子どもや若者が経験した家族のケア・介護』（生活書院、2020年）【オンライン開催】
第36回（2020年6月23日）	読書会［課題図書1］中井久夫著『災害がほんとうに襲った時―阪神淡路大震災50日間の記録』（みすず書房、2011年）［課題図書2］中井久夫著『復興の道なかばで―阪神淡路大震災一年の記録』（みすず書房、2011年）【オンライン開催】
第37回（2021年7月21日）	「世直し」ノオト（2021年度・夏）合評会【オンライン開催】

※第1回から第31回までの研究会テーマは、Co* Design第6号から第10号に掲載の「世直し」ノオトをご覧ください。

「世直し研究会」と「現場力研究会」については下記URLをご参照ください。

世直し研究会：https://goo.gl/hvkRBz　　現場力研究会：https://goo.gl/cPYDEv

「世直し」ノオトのバックナンバーは下記URLよりご覧いただけます。

「世直し」ノオト（2020年度・冬）：　https://doi.org/10.18910/83303

「世直し」ノオト（2020年度・夏）：　https://doi.org/10.18910/78965

「世直し」ノオト（2019年度・冬）：　https://doi.org/10.18910/77265

「世直し」ノオト（2019年度・夏）：　https://doi.org/10.18910/75575

「世直し」ノオト（2018年度・冬）：　https://doi.org/10.18910/73009

「世直し」ノオト（2018年度・夏）：　https://doi.org/10.18910/71352

1　世直しのコミュニケーションデザイン

2022年の春をもって大阪大学COデザインセンターの組織としての一区切りがつきます。世直し研究会の前身は、COデザインセンターの前身の組織のコミュニケーションデザイン・センターが運営していた現場力研究会です。この組織は世直し研究会のホームページよると2006年4月12日に発足しています。

当初は当時注目されていた「現場力」という言葉を手掛かりにして、各人の考える現場力を、課題図書を読むことを通して彫琢（ちょうたく）していこうとするものでした。そうこうしているうちに、みんなが考えている現場力は、えらい専門家が現場で披露する卓越した技術などではなく、一般のごく普通の人たちが、生活のいろいろなところで使っているあり合わせの道具や自分の身体を使って、自分の経験になじんだやり方で、自分流に「うまくやっていくこと」と深く関係することが、メンバーのあいだで共有されるようになりました。現場力研究会は2015年度に170回を数えて休止し、2016-2017年度は、大阪の釜ヶ崎での研究のメンバーである西川勝さんと宮本友介さんが主宰する「哲樂の会」に引き継がれました。

そして2018年度にCOデザインセンターに岡野彩子さんが研究員として赴任してきたときに研究会の再興の話があがりました。岡野さんは憲法9条をノーベル平和賞に推薦する市民活動に関わっておられ、わたしは現場力の精神を世のため人のためにつかうことはできないだろうかと考えており、すぐに浮かんだのは大坂の大塩平八郎です。わたしたちの大学では、適塾の緒方洪庵、大坂町人五同志による懐徳堂の末裔を尊称しますが、寡聞にして「大阪大学の世直し精神は大塩平八郎に遡れます」と誇る同僚はこれまでいませんでした。幕府に抵抗して最後は密告され鎮圧の中で45歳で自刀自爆死したということが瑕疵になっているのでしょうか？ わたしなどはボリビアの農村で39歳で政府軍の鎮圧部隊に超法規的に処刑されたチェ・ゲバラとならんで、弱き者のために立った彼らの精神こそが大阪大学にもっとも必要とするものだと感じます。

これまでさまざまな世直し研究会のメンバーの発表をお聞きしたり、「世直し」ノオトの編集に携わるなかで、参加者の世直しの精神に対する熱い気持ちがひしひしと伝わってきました。『南総里見八犬伝』ではありませんが、この世には世直しの精神を持った血気盛んな人たちがたくさんいますが、いまだネットワークされていない状態です。（どんな名前が将来つくかわかりませんが）未来の世直し研究会で新しい仲間と再び会える日を楽しみにしたいと思います。So long!!!

世直し研究会

https://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/Yonaoshi_study_group2018.html

（池田光穂）

2　この「崩壊」は恐ろしい

コロナ禍の日本では、2021年の年初から5月頃にかけて「医療崩壊」という言葉が躍った。思うところあって少し丁寧に新聞を読んだ。4月、大阪府の医療監が各保健所宛てに「年齢が高い方は入院の優先順位を下げざるを得ない」とメールしたことが判明した（その後府は撤回・謝罪）。命の選別に踏み込もうとする行政の発想は水面下で根深いのではないかと気になった。

大阪府からのメールは、コロナにかかわらず、DNAR（蘇生措置拒否）の意思を示している高齢者施設入所者について「看取りも含めて対応をご検討いただきたい」とも記していた（朝日新聞2021年4月30日）。DNARは心肺停止等の急変時に蘇生・延命措置を求めない意思表示のことで、重篤でも人工呼吸等すれば回復の見込みが十分あるのにそれをしないという選択を導くなら見過ごせない拡大解釈だ。だが、DNARを意思表示した入所者がコロナを発症したら病院を頼らず施設で看取ることも考えろと言っている。DNARは尊厳死関連の概念で、命の選別への横滑りを警戒すべきものだが、まさに横滑りの姿勢が示されてしまったのだ。しかも拡大解釈的であり余計にたちが悪い。大阪府と同様の通達は昨年末から今年初頭に東京都八王子市や神奈川県川崎市からも出ていた。川崎市はさらに、高齢者施設や障がい者施設に対し入所者がDNARを希望しているかどうかがわかる一覧表作成を依頼していたという（論座2021年5月19日）。行政は優生思想的にしわ寄せ先を想定したと言われても反論できないのではないか。

問題は実際の対応に表れた。病院では必要な救命措置を施せない例が多発していた。高齢者施設では患者発生の際に当人に「延命」希望の有無を聴取するも、希望なら病院に搬送できない。希望しないなら形だけの搬送先がすぐ決まるが、搬送先で必要な処置なく死亡しても何も言えないことの覚悟を迫られるという話があった（毎日新聞2021年2月1日）。自分の命を選別する踏み絵を迫られるのもむごいうえ、踏むのを拒めば「待たせ殺し」、踏んだなら「延命」を希望しないゆえの「看取り」対象にされてしまう。本当にひどい話だ。

発熱した4月下旬から保健所に200回以上電話して5月初めにようやく入院なるも、気管挿管やエクモ装着は断られ、「限りある医療資源なので若い人を優先したい」と病院側に告げられ、5月下旬に亡くなってしまった大阪府の68歳男性の話も報じられている（毎日新聞2021年7月13日）。門真市の老人ホームでは、4月から5月にかけて、入所者と職員合わせて61人がコロナに感染、このうち入院先が決まらずに施設にとめおかれ、症状が悪化するなどして入所者13人が亡くなった（毎日新聞2021年5月7日）。

突然大地震が起きてトリアージというような事態ではない。人口当たりの病床数は日本は格段に多いのにこんなふうになってしまった。この執筆時点は21年7月中旬で、数か月前のことも忘れそうになるが、何がどんなふうに崩壊したのかを忘れてはいけない。（井上こう）

3 小さな共同体

ナチス体制を拒否した市民的抵抗グループの一つ〈クライザウ・グループ〉の中心人物である法律家ヘルムート・ジェームズ・フォン・モルトケ（1907-1945）は、グループの結成以前に「小さな共同体」（*Die kleinen Gemeinschaften,* 1939）という覚書を著し、下からの自治形式によって各人の責任感を呼び覚ます共同体に、〈総統国家〉に代わる構成基盤を求めていた。それは個々人が孤立してひたすら大きな共同体、すなわち国家に拠り所を求める大衆のあり方を克服し、〈個〉の復権を目指す。この共同体の本質は、共通の目的をもってまとめられること、そして自分たちの目的の追求が大きな全体性の枠内におかれ、他のすべての人々に対する責任を理解していることにあるという。

反ナチ抵抗運動に関心を寄せ30年近く研究を続けている私は、世直し研究会を発足するという話を聞いた時、すぐにこの小さな共同体のことが頭に浮かんだ。もちろん時代背景も異なり、ヨーロッパ的秩序として思考されたものだから、そのまま現代日本に置き換えられるわけではない。しかし世直し研究会という小さな集いが、大きな全体性に対する責任を担う力を育てうる場となることを願う気持ちがあった。というのも、そもそも私が反ナチ抵抗者たちに心惹かれたのは、ドイツ国民の大半がヒトラーを支持した時でもナチズムに心酔せずその問題性を見出し、回復を求めて行動することがなぜ出来たのか、彼らの市民的勇気（ツィヴィール・クラージュ）の礎となるものを知りたいと思ったからだが、学生時代の私はまだ責任について深く考えたこともなければ、政治にもほとんど無関心だったからである。

そんな私に転機が訪れたのは、1990年代に7年間ドイツで〈外国人〉として暮らした時だった。当時ドイツでは極右による暴力事件が多発し、とくにトルコ人やベトナム人などの出稼ぎ外国人労働者（ガストアルバイター）が標的となった。しかし就労目的の滞在者にかぎらず襲撃を受けることがままあり、私自身も何度か怖い思いをした。それまで母国で微塵も身の危険を感じることなく生きていた私は、外国人として他国にいる恐怖というものを生まれて初めて味わったのだった。しかしこの経験によって、苦難を受ける者の視点をわずかなりとも授かったことに、今では心から感謝している。

そうしたドイツでの不穏な空気に怯えながら暮らす中で知ったのが反ナチ抵抗者たちの存在である。彼らの中にはユダヤ人など迫害される人々を顧みて行動を起こした者も少なくない。私はユダヤ人らが味わっただろう恐怖、孤独、嘆きを想像しようとするたび身がすくんだ。もしそのような孤独の深淵で、たった一人でも本当に、〈よそ者〉である自分のことを本気で考えてくれる人がこの世に存在したなら……。そんなことを繰り返し考えた。苦難を受ける側の視線をわずかながらも授かった今、以前のように他人事として目を背けていられなくなっていた。そして〈責任〉を担うこととはどういうことか、本気で考えるようになった。とはいえただ統治されることに慣れきっていた私にとって〈個〉の覚醒はまったく容易なことではない。しかし悲観せず、小さな共同体の中で何らかの形で責任の一端を担うことを通して責任を担う力が少しでも培われていくことを願っている。

（岡野彩子）

4　死なれっちまった

2021年6月16日21時過ぎのこと。私はワクチン接種業務が終了し、スマホをONにすると同じ番号の「着信」が16:30から7件あった。慌ててリダイヤルすると「親父（Aさんは89歳、亡き従妹の夫）が逝ってしまった。死なれっちまいました」と息子のBさん。携帯に出ないので自宅を訪ねたところ浴室で倒れていた。私に連絡が取れず、警察の検死となったが「冠動脈疾患による病死後二日」で落着となった。

Aさんは7年前に妻に先立たれてからは都内の住宅地でひとり暮らしをしていた。息子Bさんの家族は車で1時間強に住んでおり、月に数回訪問していた。飯はおろかインスタントラーメンも作れず、加えて極度の偏食のツッパリ爺だ。外食と弁当の生活で先が危ぶまれた。息子のBさんに「他の人の云うことは聞かないけれど美代ちゃんは別。治療中のガンも心配なので親父をよろしく」と頼まれた。私は没イチ二年目だった。早速、相談の上、「初めてのひとり暮らし」を楽しめるようにケアプランを立てた。弁当の選び方、電子レンジの使い方ほか、ゴミ箱の中身から質量的にも食べているか確認した。血液検査、腫瘍マーカーや歩行数の推移を健康手帳につけ、手紙で知らせるように頼んだ。私が支えた、というより、頼られる事で自分の役割を自覚し、ケアの専門家としての立ち位置を保つ事ができたと思う。喪の作業を共に行った気がする。小旅行への付き添いを頼まれる事もあった。コロナ下では、訪問もできずもっぱら電話や手紙のやり取り。歩かずに済むのはいいが、外出自粛をぼやいていた。孫たちに会えないのが致命的だった。次第に心身が老い衰えたのでBさんと相談し、ご近所さんへ朝夕の声かけのお願いを再度して、こちらからの頻度も増やす事にした。それから半月後に死なれっちまった。葬儀にはご近所の方々や子どもたちも集まり「コドクシ」「フロバ」の単語も飛び交う賑やかさ。喪主のBさんは「故人は率直な物言いで周囲を不快にさせ軋轢を増やしました。本当にすみません。7年前に逝ったおふくろがクッション役でしたが、難聴のせいもあり、一方的な電報のようで話にはならなかった。なのに、こんなにもご近所の皆さまに集まって貰え親父は幸せ者です」と、挨拶した。私は「Aさんは立派でした。＜孤独死＞いえ＜自立死＞です。斎戒沐浴まで済ませるなんてちょっとやり過ぎ」と、ゆっくりはっきりと申し上げ、柩に写経や白衣観音像そして感謝の手紙を添えた。お骨はきれいで小柄な割に立派な骨片だったのでAさんは定命を全うしたと実感した。

鷲田清一先生は「死なれる」ことが＜死＞の経験の原型だと考えたら、とかつて主張したことを思い出した。Bさんにとって想定内ではあったが受け入れ難い事象をたった一人で担うことになった。香典返しはAさんの大嫌いな高級梅干しだった。あの「への字」の口許を思い出せということだろうか。死なれっちまったが、Aさんは「死者」として私たちの中に生きているのである。

「不在」という存在感にくるまれて 箸おき一つ百日を越ゆ　（上條美代子）

5 まず「聴く」ことから——寄り添うとは

ジャーナリストとして、世間で苦にある人を支える人の取材を長く続ける中で、世直し研究会でも示唆的な話を伺い、人に寄り添うとはどういうことかを考えた。例えば「cure（治療）よりcare（お世話）」、問題解決型とは違う、「共にいる」「共苦」という支え方だ。

東日本大震災から10年の2021年3月、岩手県釜石市で長く地道な被災者救援を続ける寺院の住職が話した。震災体験が風化する中で、外部からなお支援や様々な催しに訪れてくれるボランティアには感謝するが、一方で彼らの一部が「被災者はこうに違いない」という先入観を持ち、「こうすれば喜ばれる」という勝手な思い込みで接してくる例を何度か見たという。「それでも私たち被災者は『ありがとう』と言うしかないのです。あなたは何に困っているのですか、何が辛いのですか、と尋ねることをなぜしないのでしょうね?」。

筆者が数多く取材した宗教者たちは特に、この「共苦」つまり、まず相手の身になるという姿勢が顕著だった。もちろん問題が解決するに越したことはないが、人智ではどうしようもない苦難に直面した時、人は一緒に涙を流してくれる人に自分を支えられる気持ちになる。その一つの側面は“弱さの連帯”ということだ。人間は弱い。自らについても含めてそのことを知っている者は他者の痛みを理解することができる。だからとことん付き合うことができる。そこに強靭さが生まれる。

まともな宗教者はその手掛かりを持っている。浄土教の「凡夫」つまり「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」。弱い人々の「罪」を引き受けて十字架に掛けられたイエスはいわば弱者の代表である。それらの「モデル」は生き難い現代社会でも訴求力を有する。病院のチャプレンとしてスピリチュアルケアに長年携わった僧侶は、暗黒の海で溺れている人に対して、一緒に溺れなければ何もできないということはないが、一緒に溺れた気に勝手になってしまっても、岸から浮き輪を投げるだけでもいけないのではないかと葛藤を続ける。

北九州で野宿者や生活困窮者らを支える牧師は、互いに傷付き躓くことをも含んで相手をそっくり受け入れるその活動を、伐り出した粗削りの原木を抱きしめるという意味の「抱樸」と名付けた。京都を中心に自死念慮者への電話や面談での相談活動を続ける団体の理念は、単純な「自死防止」ではなく、「死にたいほど苦しい」相手の心に共鳴することだ。だから、話を重ねてもどうしても死を選ぶ、他者にはどうしようもないそれほどの苦悩を抱えて孤立する人が最終的に命を絶つことを決めた時は、引き止めるよりも「あなたと話ができて良かった。ありがとうございました」と告げる。その人がせめて、最後まで孤独に絶望して亡くなることがないようにと願って。

よく言われる傾聴。「聴す」と書いて、「ゆるす」という読みがある。「一体どうしたの?」。そう聴くことは、まずは相手の気持ちを受け入れることだ。

（北村敏泰）

6 「しかたなかったと言うてはいかんのです」～九州大学生体解剖事件～

終戦直前、撃墜された米軍機搭乗員の捕虜８人が4回に分けて西部軍捕虜収容所から九大医学部に移送され、生体実験で殺され、遺体解剖された。この「生体解剖事件」の関係者はB級戦犯裁判にかけられた。主役である第一外科の石山教授は逮捕直後自殺し、軍との中継ぎ役の軍医も空襲で爆死していた。その為、「軍の命令か、医師側の発案か?」は明らかにされないままとなった。参加した医師と軍の直接関係者は死刑を含む重刑を宣告されたが、のち減刑された。九大当局は事件発覚直後に「当事者が勝手に大学の設備を使ってやったことで我々は全く預かりしらない」と宣言した。事件は九大のタブーとされ、真相を語る人はなく、急速に忘れられた。忘れさせられたというべきか。

筆者の伯父は第一外科の助教授であった。生体実験の１回目は知らずに参加し、２回目は手術に反対したが容れられず、後半の補助作業を行っただけであった。その後は参加しなかった。しかし、弁護団の作戦で教授の身代わりとされ、死刑判決を受けた。煩悶の末「止められなかった」責任を取り、死を受容する心境に達した。伯母の必死の再審査運動で減刑されたが、「満期服役」し、深い後悔を抱いて後半生を送った。

筆者は事件の真相を明らかにしたいと長年思っていたが、裁判資料が日本側になく、叶わなかった。2009年、国会図書館が戦犯裁判の全記録をアメリカから入手し所蔵していることを知り、取り寄せ、読み解いた。この中に再審査資料が含まれていた。本裁判では大学を庇う為に、また弁護団の作戦にのせられ、沈黙や虚偽証言をした被告たちが重刑判決に驚き、再審査にむけ真実を語っている。「捕虜は西部軍から正式に移送され」「軍の高官が立ち会っていた」「実験は公開だった」「学外の見学者が何人もいた」「学部長は承知していたに違いない」― 等々石山教授は早くから計画し、第一外科の組織を挙げ、解剖学第２教室の協力をえて「医学の進歩のため」生体実験を行った経緯も明らかになった。

「生体解剖」は西部軍と九大医学部の共同犯罪である。膨大な資料から得た筆者の結論である。

「研究結果を人体で試したい」― 石山教授は平時には許されない「悪魔の誘惑」に従った。関係医師達は医学部という組織に縛られ、積極的あるいは消極的に参加した。「教授の命令だったから」「軍人が見張っていたから」「しかたがなかった」― 参加した医師達の多くはそう語った。

「それをいうてはいかん、どんなことでも自分さえしっかりしとれば、阻止できる。仕方がなかったなどとゆうてはいかんのです」。後のインタビューでの伯父の言葉である。これが拙著をもとにしたNHK終戦ドラマ（2021年8月13日夜10時放送）の題になっている。極めて今日的な言葉ではないか。大きな力に屈して誤った道に引きずり込まれ、後に「しかたがなかった」などということがないように、今頑張らなければと筆者は思う。

参考文献

熊野以素（2015）『九州大学生体解剖事件――七〇年目の真実』岩波書店.

（熊野以素）

7　わたしと世直しと音楽と

わたしの専門である民族音楽学とは、音を紡ぐ人びとの活動（=「音楽」と定義）を文化的・社会的に研究する学問のことをさします。音楽（music）とは、わたしたちが楽曲をすぐに想像するように、ある時間経過の中で進行するメロディー、ハーモニー、リズム、そして音色の要素から構成されます。エリック・ドルフィーというサクソフォニストは、晩年のレコーディングアルバムのなかにある「ミス・アン」という曲が終わった瞬間に、”When you hear music, after it’s over, it’s gone in the air. You can never capture it again.”（君が音楽を聴き、それが終わったとき、虚空の彼方に消えてしまう。君はそれを二度とつかむことは決してできない）という声を残しています。

このような「儚い」音響的特性を研究するのが民族音楽学（ethnomusicology）です。でも虚空の彼方に消えてしまう音楽をどのようにして研究するのでしょうか?　その手がかりは、文化人類学の方法にあります。すなわち後者は、研究対象になる人びとの生活に訪問し、彼／女らと同じ食事をし、言語を学び、インタビューをおこない、観察し、彼／女らのおこなっていることを記録する一連の方法からなります。インタビューの会話もまた対話が終わった時に虚空の彼方に消えてしまいます。しかし記憶と記録は残ります。音楽も民族ごとにさまざまな様式の音楽が存在します。人びとの〈音的経験〉もまた、記譜やその他の形で記録し、また身体記憶として呼び戻す（=それを演奏や再演といいます）ことが可能なのです。民族音楽学は、このように音楽を紡ぎ出す人びと（=民族）の〈音的経験〉を、楽器の発展や変化の歴史や、そして語りや行動を記述することを通して明らかにします。この記録された書物や録音を「音楽経験のエスノグラフィー（ethnography of musical experience）」と呼びます。民族音楽学者は、このような音のエスノグラフィーを編む文化人類学者のことなのです。音楽を通して2つの学問は融合します。

では、世直しの経験と音楽はどのような関係があるのでしょうか?　音楽をすること（musicking）には、ケアや癒しの効果があり、自己に内在する葛藤を緩和する作用があります。わたしはその様子をグアテマラ共和国のケクチ民族による祭礼において体感してきました。彼／女らは、差別や貧困のらせん状態のなかで生活しながらも、祭礼において司祭へ寄り添い、寄り添われ、ケアラーとも言える司祭に心のうちを吐露し、躓きながらも生を紡ぎつづけているのです。その意味で音楽と世直しはわたしのなかでは同一です。

世直しの運動においても音楽においてもまた鼓動が速まり涙が滲むような感動があります。さいわい研究会の池田光穂先生らと「中米・カリブにおける感覚のエスノグラフィーに関する実証研究」のテーマで科研費を今年になり獲得することができました。世直し研究会で得た世直しと癒しの関係を今後はグアテマラでの音楽経験を中心に明らかにしていくつもりです。　（滝奈々子）

8　翻弄するケア

「虫ケア」――とある小売店の一角にて、偶然目にした文字である。私は少しの間、意味を考えた。既に虫が大量発生する季節に突入したのだから、「虫」を「ケア」するのではないだろう。そう、これはきっと殺虫剤用品関係だ。そう目星を付けて一角に近付くと、案の定、殺虫剤を主として蚊取り線香も並べられ、夏の到来をより強く実感させられた。これ以上の説明は不要であろう。「虫ケア」は、人間に利益をもたらす方での意味がある。この言葉は短くも的確な表現として、誰かが編み出したのである。ただ、この季節、一部の小売店ではカブトムシやクワガタムシが売られているので、昆虫の飼育用品と誰かが間違えなかった保障は無い。だから、この言葉を使うのは少し待って欲しいという気持ちもあった。誰も疑問に思わなかったのであろうか、と。

この言葉が採用された理由は、単純に購買客の目を引くからである。また、こうしたケアの誤用を実際に目の当たりにしたのはまだ2回目である。ケア用品を購入したり、目にしたり、あるいは買わずとも手に取る機会がある為か、消耗品としてのケアは生活上、特に欠かせなくなった。私にはケアという時代に巻き込まれたように思えてならず、だから、巻き込まれたなりに考えることが多い。例えばそれは、ケアの対義語とは何だろうかという問いである。傷付ける、攻撃する、責めるだろうか。だが、どれもしっくりこない。ヒントとなりそうなものは、日々の生活の中に隠れていそうである。

今年の初夏は、珍しく庭に大量発生した蛾を駆除する日々が続いた。それが終わると今度は、毎年大量発生している毛虫の駆除に専念する中、不注意で毛虫に手首を刺され、流水で患部を洗い流す処置を行ないつつ、遂に殺虫剤を手にした。こうして若干の庭の手入れを行なった。そして、お気に入りの日本製黒ブーツの手入れへ、私は半年振りに取り掛かった。馬毛ブラシによる埃落とし、汚れ落としの液体を染み込ませた布で軽く拭き、ミンクオイルを薄く全体に塗り、仕上げは豚毛ブラシで馴染ませる。革紐にもミンクオイルを染み込ませ、清潔な中敷きに新調して、踵部分の補修はまだだと判断する。古くなくとも、大切にした物には魂が宿る。そんな事に思いを馳せる自分の姿が庭にあった。

振り返れば、手近なところで無意識の内に、自分で自分を支えていた。害虫駆除は庭のケアであり、手首を流水で処置するのは皮膚ケアであり、ブーツの手入れは、そのままブーツケアである。角張った表現ならば、何らかの利益を受ける為に、自らもケアという名の維持を行なう。これらを怠れば、その後に支障が出て、不利益が生まれる。ケアの対義語はケアしない、無視するという、否定語か他の言葉の借用により表現出来そうなものだが、実際は、わが家の庭の様に複雑であろう。庭の住民にはニホントカゲ、カナヘビ、ヤモリ、シマヘビがおり、最近では新たにセミとバッタが加わった。動き回る彼らの様に、ケアも人間を翻弄するのであろうか。まだ見極めが必要なようである。　（日髙悠登）

9 「世」を問う——世間とソーシャル

このところ「ソーシャル・ディスタンス」という言葉をさんざん耳にしてきたが、元になったsocial distancing という用語とは随分と意味合いが異なるように思う。とはいえ、すでに定着してきた用法でもあるので、いまさら糺すべしというものでもないだろう。だが、二つの用語の差異がどのようにして生じているのかという点は興味深い。

Hall（1966）が提唱した proxemics（近接空間学）では、文化的背景や相手との親密さによりコミュニケーションを取る時の物理的距離（physical distance）が変化することに注目する。そのうち、social distance は他者との「私的ではないコミュニケーション」の際に取られる距離を指すものとして挙げられており、具体的な目安としては 4～12フィートとされ、プライベートには立ち入らない間柄での物理的距離という意味となる。このときの「ソーシャル」には、自己と他者の界面を指すことになる。一方で、social distancing というときには distance は動詞としての用法になり、他者との「距離を取る・接触を避ける」という意味を内包することになる。ここに係る social は個と群の間、集団全体での取り組みを指すことになる。ソーシャル・ディスタンスと social distancing では「ソーシャル」の表すスコープが異なるのである。

阿部（1995）は、日本で古来より使われた「世間」という言葉は、自分と関わりのある世界という狭いものであって、西欧的な「自己から切り離して対象化した」社会（ソサイエティ）とは等置できるものではなかったと指摘している。確かにそうだ。しかし、「ソーシャル」については上記のように幅広いスコープを持つ。

「世間」とは、元来の仏教用語としては煩悩に溢れたこの世、浄土に対する穢土の意を表した。われわれ衆生はそこに身を置きつつ「出世」にあこがれるのである。「世間慣れ」や「世間知らず」といった言い回しは、自己と他者の界面での個人の特性を表している。また、自らを取り囲む環境という意では「よもやま」という言葉もあるが、いずれもその対象は漠然としたものである。

一方で、「ソサイエティ」は「人の集まり」が原義であるが、その対象は具体的な特定の目的を持ったものであり、はっきりとした境界線を持ったものであり、共同体・自治体を指すこともある。「ソサイエティ」に「社会」という訳語が定着する以前の日本語では、「世間」よりも「ムラ（村・群）」といった方が近いのかもしれない。「ソーシャル」は「ソサイエティ」と同根であり、その形容詞としても用いられるが、個と個、個と群の界面での特性を含んでいるという点で「世間」と「ソーシャル」には共通する部分があるのではないだろうか。さて、「世直し」の世とは……。

参考文献

Hall, E. T.（1966）*The Hidden Dimension*, New York: Doubleday.
阿部謹也（1995）『「世間」とは何か』講談社.

（宮本友介）

10 「助かる文化」を考える

2020年9月頃、NPO法人リベルテさんに声をかけていただいて、「ちくわがうらがえるpresentsのきした話：ソロソロ、コロナ（……）」というイベントにゲストスピーカーとして参加した。メインの話題は長野県上田市でコロナをきっかけに生まれた「のきした」というプロジェクトのことだった。それは劇場や銭湯や喫茶店、食堂、ゲストハウスなどが連携し合って、街のなかに「雨風をしのげる場＝のき」（困難な状況に置かれた時に逃げ込める場所）を大なり小なり分散的に作ることで、「助かる文化」を形成するというものである。

私は精神科グループホームで非常勤スタッフをしていたこともあって、助ける - 助けられるという非対称な関係性で支援の現場が回っていることを体感的に知っていた。この非対称な関係は、支援者側の「助けてやってる」感（優越感など）や支援される側の「助けてもらってる」感（恥や劣等感など）を感じさせたり、支配 - 従属関係を生み出したりする要因といえる。仕事や状況の性質上、非対称な関係は避けがたい（そのおかげでうまくいくこともある）が、行き過ぎてしまう可能性はどこにでも潜んでいる。「助かる」という言葉は、そんな非対称な関係をほぐす絶妙な観点を提供しているのではないだろうか。そんなささやかな手ごたえが私にはあった。

「助かる」とは能動的な行為者がいない（あるいはその能動性が薄い）状況での受動的な結果＝出来事と言えるだろう。自分（たち）ではどうしようもない困難な状況に置かれているときに、「〇〇さんに助けてもらった」と思うより以上に「助かったぁ～」と思えるような状況や環境とはどのようなものだろうか。それを文化的に形成していくことは可能なのだろうか。

助かるためには何が必要だろうか。何よりもまずは出会いの機会だろう。たとえば、知らない土地で道に迷い、とうとう深夜になってしまったとして、そこで煌々と光るコンビニを見つけたとき「助かった……」と心底思うだろう。偶然にも自分を助けることになる何かや誰かに出会えることが、ほんの一時であったとしても不安や疲労を取りのぞく時空間への導きとなりうる。

そのような出会いの機会があるためには、つまり偶然の出会いの可能性を高めるためには、助けになる場所や誰かができるかぎりいつもそこにある／いることが望ましいし、そういう場所がいくつも分散してあることが望ましい。そしてその場所があることや、そこに誰かがいることが日常的であることが望ましい。たまたま日常の営みの一端で出会ったからこそ「誰かを助ける」ことの能動性が薄い状態で出会えるような、誰かが知らぬ間に助かってくれているような、そんな日常性。

非日常をサバイブする誰かを自分たちの日常の営みのなかで受け止めることに「助かる文化」のエッセンスがあるだろうか。とはいえ、そのためにはその営みに誰かを歓待する余裕がある必要がある。この社会のなかではその余裕こそが難しくなっている事柄でもあるのだが。

（山森裕毅）

（投稿日：2021年7月31日）
（受理日：2021年12月13日）